

地本沢川地地井巻田根海泉畑田中田地森崎城塚裏館欄門

谷の成谷谷荒餅大矢谷谷のケ

1 捕海成下大士上上西鳥今西石南西  
 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21  
 22 新沢一里  
 23 東  
 24 北  
 25 衣  
 26 伝

新幹線開通道路

27 鬼野西(中・近世)  
 28 南西(中・近世)  
 29 野(平・近世)  
 30 大(平・近世)  
 31 八木(平・近世)  
 32 台(平・近世)  
 33 五(平・近世)  
 34 南(平・近世)  
 35 南(平・近世)  
 36 野(平・近世)  
 37 野(平・近世)  
 38 野(平・近世)  
 39 野(平・近世)  
 40 野(平・近世)  
 41 野(平・近世)  
 42 野(平・近世)

経貫通開通道路

● 縄文時代  
 ○ 弥生時代 土葬  
 ⊗ 古墳・奈良時代  
 ○ 平安時代  
 ○ 中世・近世

● 編谷地・梅の木・成沢・下成沢  
 大谷地・編谷地・山ノ崎・新成  
 東・北・東・伝大手門

● 編谷地・西根・鳥海・今泉・西大根  
 石田

● 編谷地・上大谷地・中葉谷・上藤田  
 西根・鳥海・今泉・西大根・石田  
 南大平・西田・南谷地・編谷地  
 中ノ森・山ノ崎・新成

● 梅の木・成沢・池沢・一里泉  
 老館・衣可橋開通道路・伝大手門

凡	例	地形区分
○	(二重) 一里通運路	河階低地
●	本調査(一里通運路)	北(上川階)
○	縄文時代	自然堤防
⊗	弥生時代	下位段丘
○	古墳・奈良時代	中位段丘
○	平安時代	上位段丘
○	中・近世	

経貫通開通道路	新幹線開通道路	その他の遺跡
1 編谷成下大士上上西鳥今西石南西	27 鬼野西(中・近世)	43 上長沼古墳
2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21	28 南西(中・近世)	44 上長沼古墳
22 新沢一里	29 野(平・近世)	45 長沼古墳
23 東	30 大(平・近世)	46 長沼古墳
24 北	31 八木(平・近世)	47 長沼古墳
25 衣	32 台(平・近世)	48 伝大手門
26 伝	33 五(平・近世)	
	34 南(平・近世)	
	35 南(平・近世)	
	36 野(平・近世)	
	37 野(平・近世)	
	38 野(平・近世)	
	39 野(平・近世)	
	40 野(平・近世)	
	41 野(平・近世)	
	42 野(平・近世)	

なか あら まき  
中 荒 卷 遺 跡

遺 跡 名：中荒卷遺跡

所 在 地：胆沢郡金ヶ崎町大字西根

字中荒卷16番地の1.2 17番地の1

18番地1 19番地1～3 .20番地

字下荒卷3番地4番地5番地1.15～38

20番地の1.2

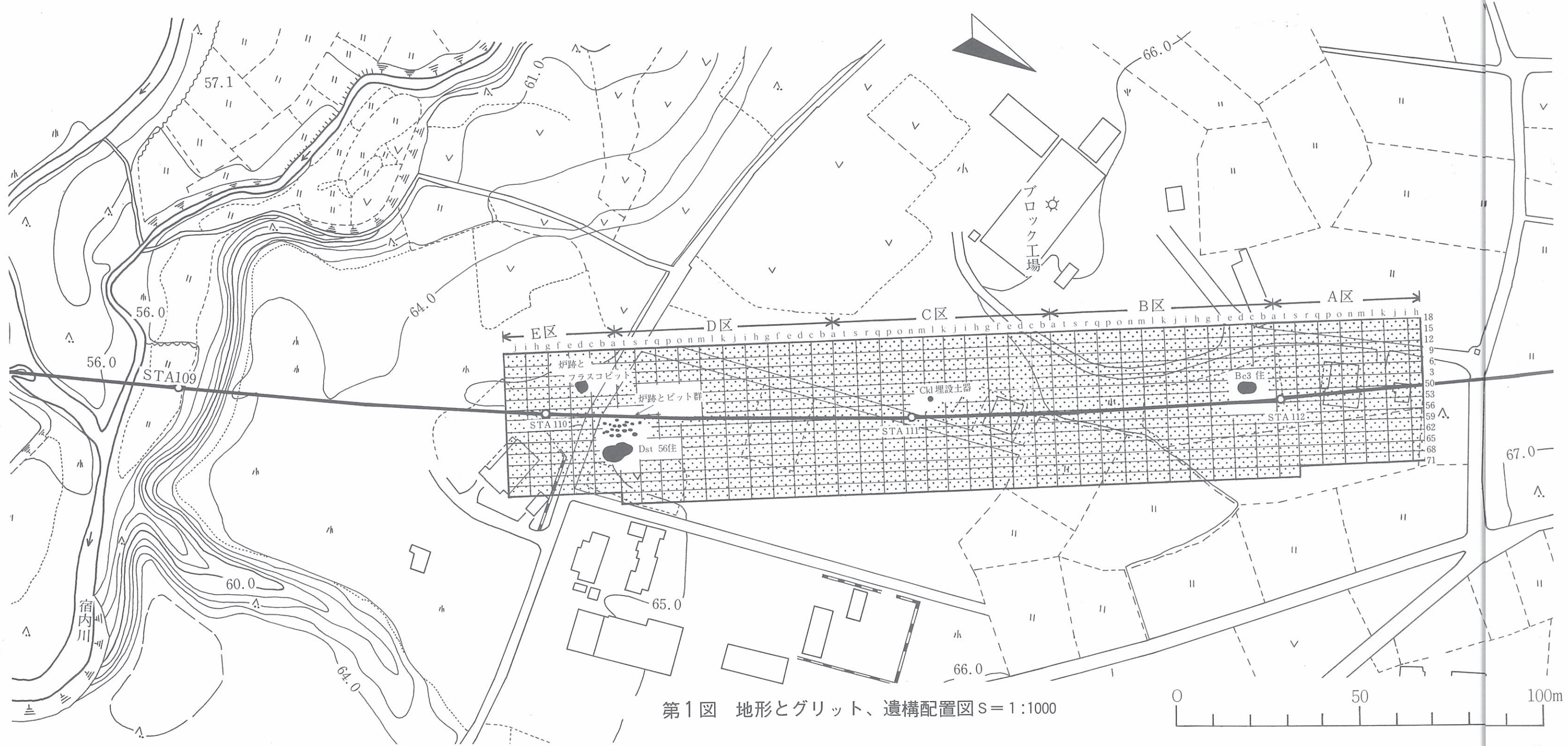
調 査 期 間：昭和47年9月～12月

昭和48年3月．昭和50年8月

調査対象面積：8,750m<sup>2</sup>

発掘調査面積：3,000m<sup>2</sup>





第1図 地形とグリット、遺構配置図 S = 1:1000

## I 遺跡の位置と立地

中荒巻遺跡は、金ヶ崎町大字中荒巻から字下荒巻にわたる地域で、国鉄金ヶ崎駅から北西 1.5 km の地点に位置している。扇状地状に広がる低位段丘（金ヶ崎段丘）上の平坦地である。駒ヶ岳に源を発して北上川に注ぐ宿内川の北岸台地上にあたる。西方の北高40～50 m（標高 100 ～ 125 m）の高位段丘である西根段丘と東方の北上川河岸低地にはさまれたこの地域は、水田地帯が広がり、東北本線、国道 4 号線が南北に縦走している。

調査区は、南北 270 m、東西 42 m の範囲に、草地、畑地、及び水田となっており、又、斜めによぎる形で農道が 3 本走っている。南側は、縄文前～後期の遺物が発見されている荒巻遺跡、北側は縄文中期の遺物が散布している中荒巻遺跡で、それぞれ周知の遺跡である。当調査区はその両遺跡にはさまれた地域であるが、遺跡名を中荒巻遺跡として調査報告するものである。表採遺物や地形から、縄文中期の集落、もしくは、キャンプ設営地等の検出が期待された。

1 km 内の周知遺跡としては、東北縦貴自動車道関連遺跡の、上餅田遺跡（土師器、須恵器）が南方の宿内川をはさんだ対岸平地上にある。北方 600 m 地点に荒巻北遺跡（土師器、須恵器）、西方の西根段丘東端斜面に菖蒲沢 I、II 遺跡（縄文前期、土師器）、東方に、丸子館（館跡）、川口田遺跡（縄文前期、中期）、花館遺跡（館跡）がある。金ヶ崎町で知られている縄文中期の遺跡は、西根の草刈場、吉田沢、和光、和田、千貫石、高谷野原、櫛引沢、三ヶ尻の花沢、永沢の鳥ノ海、平林、横沢、大森などである。

## II 遺跡の基本層序

調査区は北から南にかけてゆるやかに傾斜し、調査区北端と南端の標高差は約 2.5 m である。表土層の厚さは 30 cm ～ 50 cm と一様ではない。基本層序は IV 層に分けられる。

- I 層 黒褐色腐植土 表土、耕作土、土器片含む。
- II 層 暗褐色シルト質土 遺物包含層、土器片、石器、炭化物等を含む。
- III 層 黄褐色シルト質土 漸移層、粘性がある。
- IV 層 黄褐色砂礫層 黄色味が強くシルト質、礫を含む。

II 層は上層部暗褐色、下層は褐色となるが、遺構内及び周辺部分は赤褐色を呈する。III 層は攪乱があり、基盤となる IV 層と不整合を成している。又、II 層下面に III 層がブロック状に入り込む部分が多い。III IV 層は地山面である。IV 層の礫層は、金ヶ崎段丘の基盤層、溜木礫層にあたる。川辺の斜面や住居跡床面には IV 層が露出している。

### Ⅲ 検出された遺構と遺物

遺跡内に検出された遺構は、竪穴住居跡 3、フラスコピット 1、埋設土器 1、石囲炉跡 2、ピット群遺構 1 である。その他大形の石皿が、Cst 9、Def 3、Dij62 の各グリットに検出された。発見された遺物は縄文中期土器片 7,400 点、石器類 130 点、土師器須恵器片 43 点である。主に住居跡埋土及び周辺に遺物量が多い。出土量が多いにもかかわらず復元可能な個体数は、12 点と少ない。いずれも磨滅が著しく、胎土のもろいものがほとんどである。文様表現から縄文中期中葉大木 8 a～8 b が主体である。石器は、石鏃、石匙、磨製石斧、スクレーパー、石皿、磨石等である。石鏃は 2 点のみと少ない。土製品は板状土偶の破片 1 点である。

出土した遺物から、検出遺構はすべて、縄文中期大木 8 a～8 b の時期のものと思われる。

#### 1 B C 3 住居跡 (第 2 図)

〔遺構の確認〕 調査区の北側にある Bcd 3～50 グリットに渡って検出された。

〔平面形、規模〕 長軸 3.7 m、短軸約 2.7 m の長楕円形である。長軸の方向は、南北中心線より 25°西に傾く。南東部には、ほぼ円形の攪乱部分がある。

〔堆積土〕 断面で観察する限り、ほぼ単層と見られる。褐色土で、床面に接した下部から壁面検出レベルの上部まで土器片を含んでいる。基本層序第Ⅱ層にあたり、炭化物を含む。

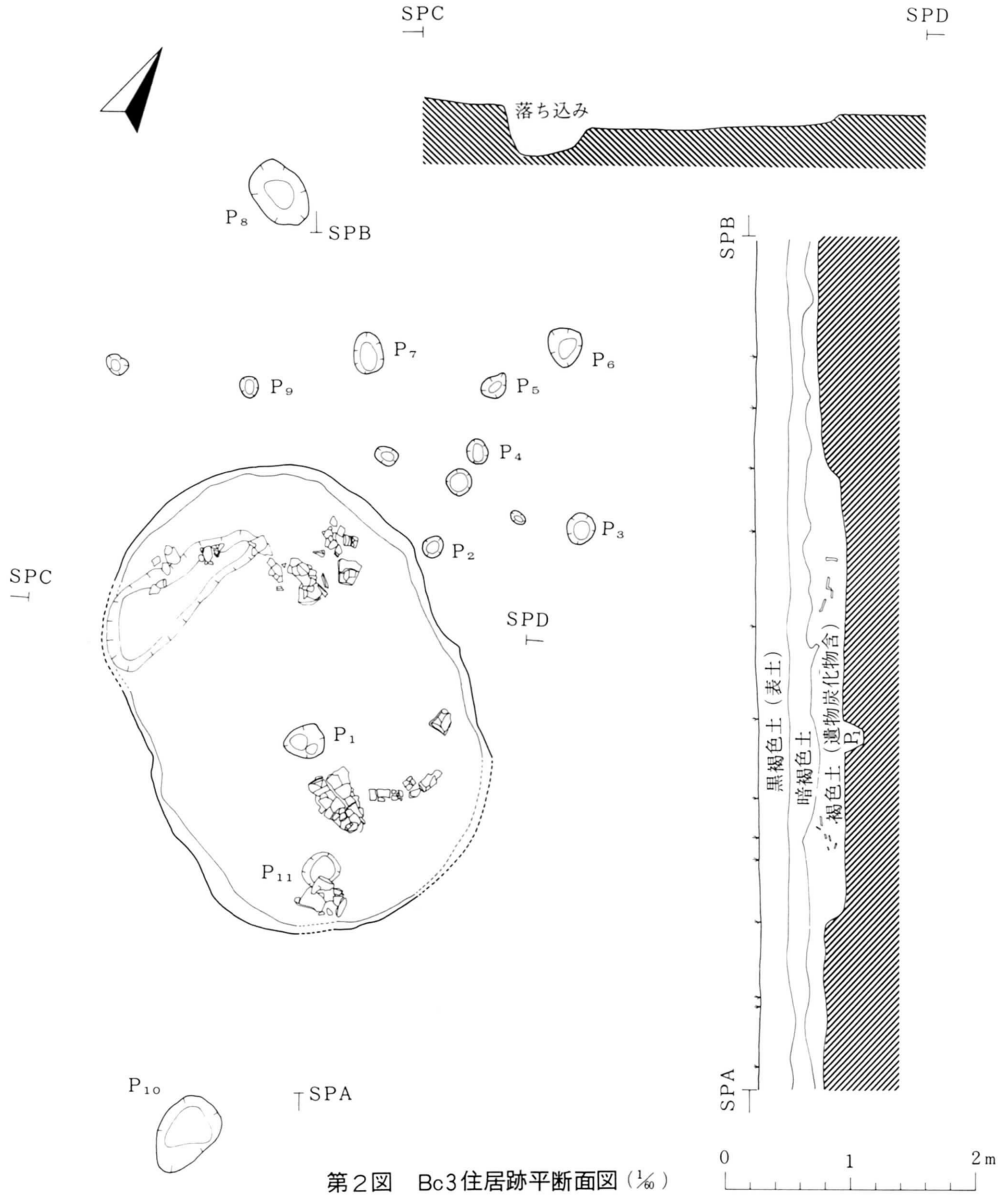
〔壁〕 検出された壁は高さ 10～20 cm と浅く、西側が若干深くなっている。南東部は攪乱部分のため不明だが堆定は可能である (図中点線部分)。

〔床〕 地山を床面とし、貼床は見られない。ほぼ平坦である。床面には、復元可能土器数点を含め、破片が散乱する。

〔柱穴〕 住居跡内のピットは 2 基、外側に 13 基、計 15 基ある。支柱穴と考えられるのは P<sub>1</sub> と P<sub>11</sub> の 2 基だけである。住居跡内外のピット計測値及び埋土については下表の通りである。

第 1 表 Pit 計測値及び埋土状況

ピット No	上場径	下場径	深さ	埋 土 状 況
①	31 × 26 cm cm	14 × 13	15.5 cm	黒色土の中にシルトまじりの粘土を含む。色調は上の方が暗褐色、下の方は粘土が多く、上より褐色味を帯びている。あまりしまっていないで、軟く粘性がない。
②	17 × 17	10 × 10	10.5	pit①と同じく、黒色土の中にシルトまじりの粘土を含み、色調も上部が暗褐色、下部は上部より褐色味が強。軟く、しまりのあまりよくない粘性のある土である。
③	22 × 25	13 × 16	14.0	黒色土とシルトまじりの粘土から成る。 pit②と同様軟く粘性のある黒色土であるが pit②とちがいレキが下の方に若干はいつている。 pit①②と同様上の方が黒っぽく下の方に粘土が多い。
④	17 × 20	8 × 15	9.0	軟く、埋土は pit①②と同じ状態である。
⑤	20 × 19	9 × 7	10.0	pit③と同じで下の方にレキが含まれている。
⑥	27 × 30	13 × 15	19.0	pit②と同じ状態
⑦	23 × 32	13 × 22	10.0	若干レキを含むが埋土状態は他と同じである。
⑧	44 × 51	22 × 24	11.0	他の pit に比べ黒土のきめが細かくよりまっ黒で、中に土器片も混入していた。上部の黒色土は軟く、その下の部分はバサバサしている。
⑨	14 × 17	7 × 11	4.0	pit②と同じ状態
⑩	37 × 55	36 × 29	17.0	pit⑧と同様で、黒色土は軟くまっ黒であり、土器片も認められた。
⑪	31 × 27	20 × 21	22.0	



第2図 Bc3住居跡平断面図(1/50)

ピットの埋土状況と規模からP<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>、P<sub>9</sub>とP<sub>8</sub>、P<sub>10</sub>とは明確に区別される。又、レキの有無によりP<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>9</sub>とP<sub>3</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>7</sub>は区別される。埋土状況、規模、配列から、その性格や時期的な新旧、住居跡との関連は判明しない。

〔炉〕 確認されなかった。

〔その他の施設〕 北西壁際に落ち込み部分がある。床面からの最深部は約24cm、北西側の縁辺は壁面と一致し、床面上を不正な長楕円に伸びた形で、長軸は1.54 mに及ぶ。埋土は、黒褐

色シルト混じりの粘土から成る暗褐色土である。全体的に炭化物を含むが上面に多く下部に少ない。土は軟かく粘性なくパサパサしている。まわりとの肌離れ良く土器片は、下方にまで混入している。混入土器片は、すべて住居跡床面出土と同時期のものである。不整形であることから重複の可能性もある。住居跡と同時存在と考えられるが、その性格づけとともに、断定はできない。

〔出土遺物〕（第3図～第4図 図版3～6）

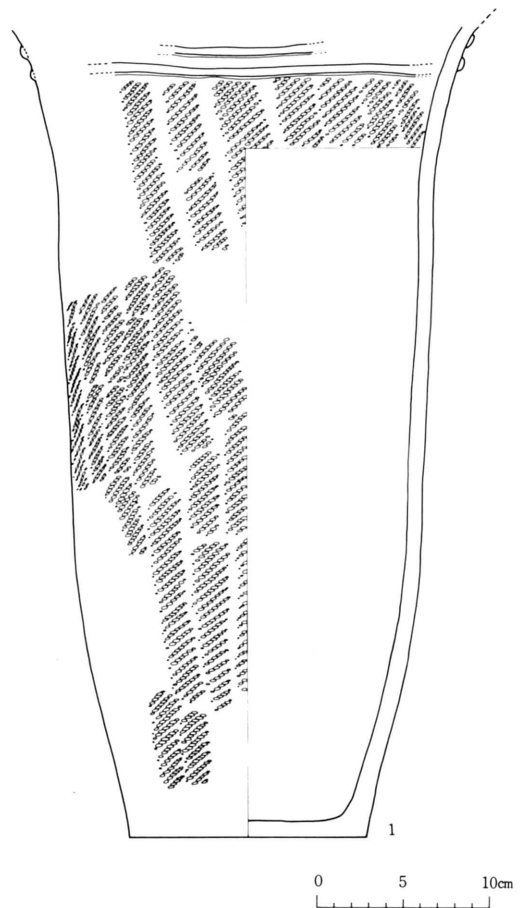
土器片は、床面出土と堆積土中に認められるもの1,077点（復元可能5点）、西壁際落ち込み部分では51点である。石器は記録されたもの磨石1点だけである。後述の土器分類から、口縁部破片の内訳を見ると特にIV群土器が多い。時期は大木8a式の新か大木8b式期の古い方と見られ、縄文中期中葉である。本住居跡の設営期もここに求められる。

第4図2の土器は、北西壁際落ち込み遺構の埋土中から出土した。頸部がすぼみ胴部に張りを持つ平縁の深鉢である。一本の隆起線の他は三本の平行沈線文が口縁や胴部に施されている。磨滅があり焼成不良、地文はRL単節斜縄文。口径は17cm、 $\frac{1}{3}$ 残存底部欠損、器面に煤付着する。 第IV群5類。

第4図3は、床面南半部に出土。口縁内湾し胴部の張ったキャリパー形平縁深鉢で、口径14cm、底径6.2cm、器高22.4cmである。隆起線で口縁部に区画文、頸部から下半は平行沈線の直曲線文であり、剣先状渦巻文も見られる。地文LR単節斜縄文、胎土に細砂含み焼成良好、 $\frac{1}{2}$ 残存。 第IV群5類。

第4図4は、床面南東部に出土。口縁形態は不明だが、胴部外傾ぎみに立ち上がる深鉢で、底径7.8cm、器厚6mmの中型である。胴部にはやはり平行沈線文。焼成普通で、胴部下半は赤変しており、又、煤も付着する。地文は右撚りの原体による撚糸文縦回転である。口縁部欠損。 第IV群5類。

その他第3図の大型深鉢はP<sub>1</sub>の南隣床面に横



第3図 Bc3住居跡出土土器実測図



位に出土している。隆起線や沈線による渦巻文モチーフをもつ第IV群土器が多く、一つの土器組成を示唆している。



第4図 Bc3住居跡出土土器実測図(4)

第2表 BC3住居跡出土、口縁部破片分類別数

分類	I群	II群	III群	IV群	V群	分類不	胴部	底部	石器
個数	0	0	11	120	0	53	874	83	磨石1

2 Dst 56 1号、2号住居跡(第5図 図版1)

〔遺構の確認〕 調査区の南側、Dst 56～65、Eab 56～65グリット地点に検出された。調査区を横断する町道の北側約3m地点にあたる。

〔平面形、規模〕 南端部は一部削平をうけ不明の個所がある。壁の形状と2基の石囲炉から北側と南側の住居跡の重複と推定され、北半部を1号住、南半部を2号住居跡とした。重複は床面断面図や壁の交錯する状況からは明確でない。1号、2号とも、直径約6mのほぼ円形プランであろう。重複と見ずに1棟の住居跡とすれば、長軸約10m、短軸6mの長楕円形プランともなる。1号、2号住の時期的前後関係は不明である。

〔堆積土〕 検出された壁高は5～10cm前後と浅く、堆積状況は不明である。残っている床面直上の堆積土は赤褐色を呈し、土質はパサパサしており可塑性に欠ける。炭化物、焼土、火山灰が少量ずつ全般的に含まれている。1号、2号住とも共通する。

〔壁〕 検出面が床面から浅く、南端部は不明となる部分や、ピット等による崩壊の為、稜線に凹凸がはげしい。

〔床〕 ほぼ平坦で1号住と2号住の境界と考えられる部分にも段差が認められない。ただ2号住居跡部には、黄色味の強いローム層(シルト)が床面を広く形成している。その床面下の断面を観察したが、黄褐色ローム層の他黒味のあるローム層、粘性のある黒褐色土や礫が入

っている部分や掘り込みや攪乱を受けた部分などで一様でない。従ってローム層を貼床したのではなく、地山面を床にしているものと考えられる。

〔柱穴〕 住居跡内の支柱穴と成り得るものは検出されなかった。壁にそったピットはP<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>までである。P<sub>8</sub>は攪乱ピットである。壁にそったピットはP<sub>1</sub>～P<sub>9</sub>であるが住居壁との関わりは不明である。ピットの計測値は第3表の通りである。

第3表 ピット計測表

ピットNo.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>
上場径	36 <sub>cm</sub> × 47 <sub>cm</sub>	34 × 27	48 × 50	32 × 34	65 × 39	28 × 19	44 × 38	31 × 28	110 × 60	62 × 46
下場径	26 × 23	18 × 12	42 × 17	—	—	18 × 8	30 × 22	—	—	44 × 40
深さ	23.5	29.0	27.0	—	—	10	—	—	—	59

〔炉〕 1号、2号住居跡とも、ほぼ中央部に1基ずつ石囲い炉を持つ。1号炉は、開口部は南東向、長軸56cm、短軸46cmで多量の焼土を囲み、8～10cmの石をほぼ円形（馬蹄形）に配列している。2号炉はやや大きく長軸70cm、短軸50cmで長方形を呈す。尚開口部は北西向である。2号炉の石は、1号のそれに比較して配列が整然としており、径8～26cm大の川原石である。

〔その他の施設〕 1号住居跡の炉の南東付近に、炭化物を含む落ち込みがある。最深部は床面より7～8cm前後と浅い。若干の土器片が混入している。その他不整形の落ち込み部分が住居跡外に存在するが性格は不明である。2号住居跡南壁際に最大幅80cm、深さ床面より4～6cmの、壁に添って延びる落ち込みがある。周溝の一部とも考えられるが確認できなかった。住居跡縁辺部外側に、土器片や石が密集して散布された所が、南に2箇所存在する。焼土も、同じく南側に3箇所検出されている。

〔出土遺物〕 縄文土器の出土総数は3,892点、すべて破片のみで、復元できるものはない。分類上の第I群～第V群まで、まんべんなくあるが、特にIV群が多数を占める。床面直上に設置又は横転した個体はない。Bc3住居跡と比べ、I群、II群土器が割合多い。どの破片も磨滅が見られる。石器は床面上から打製石斧2、石斧様粗製石器2、磨石1であるが、推積土中及び周辺から48点と多量である。石篋やスクレーパー類が多い。内訳の詳細は第4表の通りである。尚、遺物量について1号、2号住を比較するには無理があり、大体の傾向としてとらえた。

第4表 Dst 56 1号、2号住出土遺物（土器）

地点	分類	I群	II群	III群	IV群	V群	分類不	胴部	底部	計
1号住		7	8	15	102	7	54	1982	135	2310
2号住		2	7	15	96	11	51	1322	78	1582

地点	分類	石鉄	石匙	石篋	スクレーパー	打製石斧	磨製石斧	石斧様粗製石器	扁平大型打製石器	磨石	石皿	その他	計
1号住		1	1	6	4	0	1	3	0	6	9	9	40
2号住		1	0	0	4	2	0	3	1	0	0	2	13



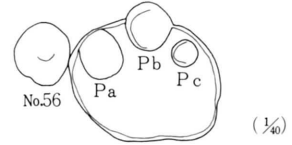
第5図 Dst50 炉跡及びピット群、Dst56 1号、2号住居跡平面図 (1/60)

3 Dst 50炉跡及びピット群 (第5図、6図、図版2)

Dst 56住居跡の西隣グリッド、Dst 50~53、Eab 50~53で検出されている。石囲炉とその周辺に散在するピット群である。ピット群には柱根の残っているものはない。



〔炉跡〕 (第5図、第6図) 4~20cm大の川原石を配列、確認面からの掘り込みは5cm前後と浅い。内部の焼土は硬くガリガリの状況であった。焼土を剥ぎ取った下面には、第6図のPa~Pcのようなピットがある。Paの堆積土は暗褐色土の粘土質土、下半部に若干の炭と磨製石斧を含む。Pbの堆積土は、淡褐色土で少量の礫を含む。PcはPbよりもわずかに黄色味がかり淡褐色土で礫



第6図 炉跡(上)と炉跡の下部ピット

は含まない。炉跡西隣のPd (No.56) は淡褐色土で粒子状の炭化物和焼土を少々含む。土器片等は認められない。炉跡に付随するものと思われるが性格は不明。

第5表 ピット計測表

ピットNo.	上場径	下場径	深さ	ピットNo.	上場径	下場径	深さ
1	46 × 62	20 × 47	20.0	35	61 × 32	—	—
2	50 × 48	41 × 40	51.0	36	32 × 44	18 × 23	37.0
3	39 × 40	10 × 15	11.0	37	85 × 38	—	—
4	28 × 27	11 × 12	27.5	38	66 × 66	33 × 33	51.0
5	不明 × 136	56 × 36	10.0	39	60 × 46	32 × 29	9.0
6	44 × 44	24 × 24	29.5	40	124 × 45	96 × 26	9.5
7	28 × 29	17 × 23	11.5	41	45 × 39	29 × 20	26.0
8	21 × 23	18 × 20	16.0	42	41 × 26	27 × 17	15.5
9	73 × 83	—	—	43	18 × 19	10 × 10	13.0
10	68 × 42	—	—	44	30 × 26	19 × 21	36.0
11	32 × 28	26 × 18	3.5	45	22 × 22	15 × 16	27.5
12	26 × 26	24 × 20	3.0	46	39 × 27	23 × 25	26.5
13	29 × 35	16 × 8	8.5	47	37 × 36	23 × 30	34.5
14	52 × 56	28 × 32	22.5	48	27 × 26	15 × 17	18.0
15	25 × 24	16 × 16	14.0	49	26 × 24	15 × 16	23.5
16	23 × 26	13 × 17	15.0	50	35 × 38	24 × 30	36.0
17	41 × 44	30 × 36	33.5	51	38 × 39	20 × 26	8.0
18	40 × 32	26 × 22	34.5	52	30 × 27	23 × 15	30.5
19	38 × 32	17 × 24	30.0	53	29 × 32	24 × 20	25.5
20	36 × 26	27 × 19	12.5	54	25 × 23	13 × 14	17.5
21	35 × 33	26 × 23	17.5	55	41 × 29	19 × 30	33.5
22	20 × 19	8 × 9	5.0	56	33 × 29	6 × 8	—
23	35 × 35	12 × 32	13.0	57	27 × 27	15 × 17	9.0
24	24 × 22	17 × 16	16.0	58	23 × 24	9 × 8	40.0
25	25 × 27	10 × 12	13.5	59	22 × 19	11 × 8	6.5
26	29 × 27	15 × 14	12.0	60	26 × 29	11 × 12	43.5
27	28 × 24	15 × 14	25.0	61	25 × 21	11 × 8	6.5
28	25 × 25	18 × 20	39.0	62	28 × 22	12 × 11	13.5
29	32 × 37	29 × 29	18.5	63	34 × 54	—	—
30	48 × 35	25 × 34	—	64	33 × 35	17 × 26	13.5
31	30 × 23	20 × 20	—	65	67 × 88	—	—
32	32 × 30	24 × 23	4.5	66	153 × 148	—	—
33	23 × 27	16 × 20	27.0	67	21 × 20	16 × 11	—
34	75 × 63	—	—	68	27 × 37	24 × 24	—

炉の規模は、長軸約90cm、短軸75cm程度の円形もしくは馬蹄形と推定される。Dst 住居跡の石囲炉と同形態のものであろう。南東側60cm地点に、焼土の小ブロック密集地が70cm四方の不整形を成して存在する。

〔ピット群〕 第5図No.1～No.67まで検出された。確認面での上場径30cm程度のものが一般的であるが、不整形の掘り込み部分に伴っているものがある。深さは15～50cmと一様でないが30cm前後のものが多い。前述のように柱根は残っていない。

ピットの規模や配置から、掘立柱又は堅穴住居の主柱穴になりそうなものを抽出してみた。平面的なまとまりからすると北側のNo.1～24のピット群がNo.5、9、10、14等を囲んでほぼ円形に展開していることと、既述の炉跡を囲んでNo.25～68がやはり、ほぼ円形にまとまっていることがわかる。前者はともかく、後者は炉跡を囲む円形の配列がより明確であり、Dst 56住居と同規模の堅穴住居跡の主柱穴ととらえて大過ないと思う。炉を囲んで約4m径内にほぼ円形プランで等間隔に並べ得るピットは、No.26—29—32—39—42—45—50を結ぶライン、27—33—38—41—45—50—51のラインが想定される（第5図の点線部分）。しかし壁は検出されず、レベルの凹凸など検討しても明確でなく、住居跡の柱穴であると断定できる根拠はない。住居跡とすれば、少なくとも2回以上の建て替えと見なければならぬ。いずれこのピット群の明確な把握は困難だが、住居跡の柱穴となる可能性は高い。

〔出土遺物〕 炉跡及びピット群の堆積土中からは、縄文土器 691点（口縁79点、胴部595点、底部17点）、石器15点、内訳は第6表の通りである。第IV群土器を主に、各類出土している。

第6表 Dst 50 炉跡及びピット群出土遺物

分類	I群	II群	III群	IV群	V群	分類不	胴部	底部	計
個数	4	6	4	28	1	36	595	17	691

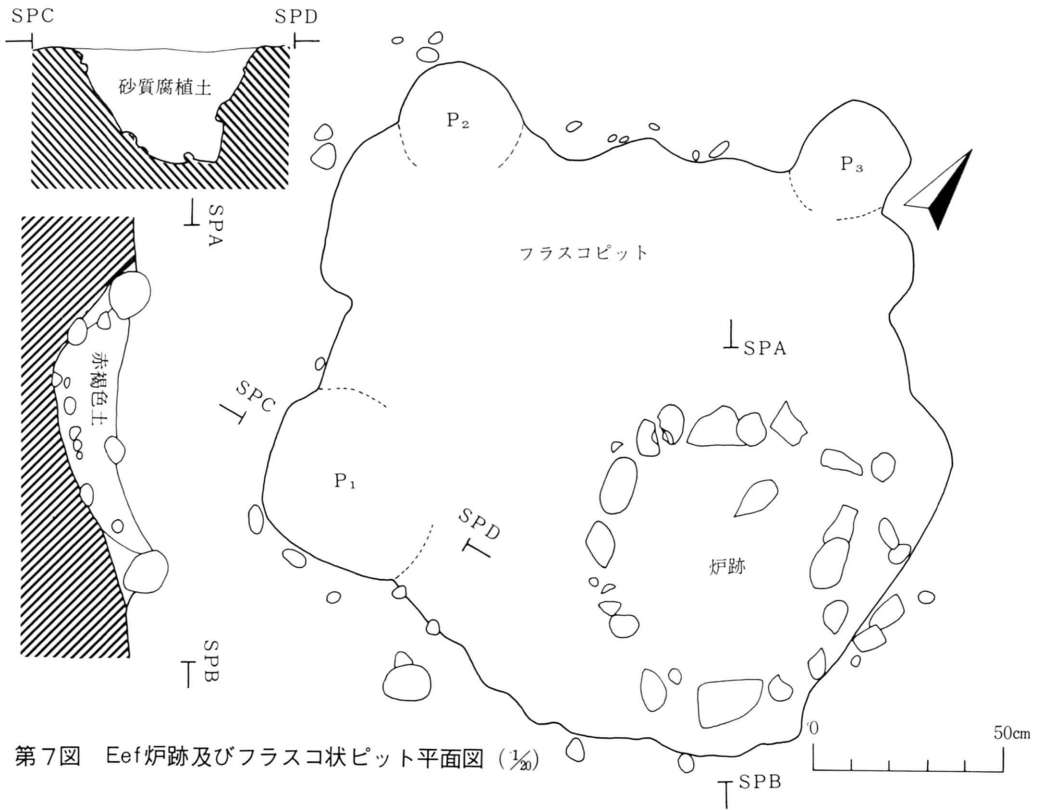
分類	石鏃	石匙	石筥	スクレーパー	打製石斧	磨製石斧	石斧様粗製石器	扁平大型打製石器	磨石	石皿	その他	計
個数	0	0	0	4	0	1	0	0	4	3	3	15

#### 4 Eef12炉跡及びフラスコ状ピット（第7図、図版2）

調査区の南端、町道をはさんでDst 56住居跡の南西約15mはなれた地点に検出された。Eef 12グリットである。Eef 炉跡はフラスコ状ピットの上面にある。

〔炉跡〕 長軸（南北）85cm、短軸（東西）80cmのほぼ円形の石囲炉である。最深部約20cmの鍋底状の掘り込みの上に径10cm内外の川原石を並べて築かれている。堆積土には炭、焼土が混じる。周辺にフラスコ状ピットの壁にP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>が検出されているが、炉跡との関係は不明である。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>の堆積土は、黒色の砂質腐植土である。これら以外のピットは確認されていない。

〔フラスコ状ピット〕 検出面では不整形であるが平面形は1.6m径程のほぼ円形を呈していたと思われる。その縁辺部がP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>によって切られている。断面形は、作業の都合で作図で



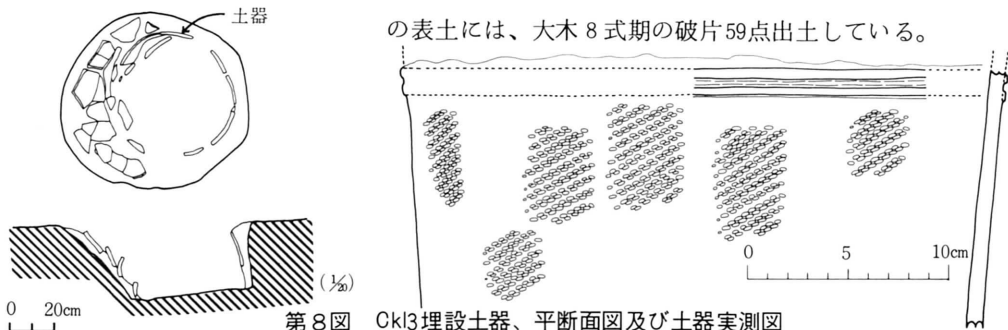
第7図 Eef炉跡及びフラスコ状ピット平面図 (1/20)

きなかったが、フラスコ状に落ち込んでいたものである。埋土内に遺物はない。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>及びEef炉跡よりは以前に造られたことは確実である。性格は不明である。

〔出土遺物〕 表土と炉跡から縄文土器 204 点（口縁 18、胴部 178、底部 8）、石器 2 点。第 IV 群土器が多く出土している。石器は石筥と打製石斧である。

### 5 Ck1 3 埋設土器 (第 8 図、図版 2)

調査区の中央付近 Ck1 グリットで、直径 50cm、深さ約 20cm の掘り込み部分に深鉢が埋設されていた。隆起線が口縁部を回る文様構成をもつ第 IV 群 1 類の深鉢であるが、磨滅が著しく器形文様とも不明確である。口径約 30cm 前後と推定される。土器内の胎土分析はしていない。周辺の表土には、大木 8 式期の破片 59 点出土している。



第 8 図 Ck13 埋設土器、平断面図及び土器実測図

#### IV 出土遺物について

##### 1 土器 (第9～12図、図版3～6)

本遺跡出土の縄文土器破片数は約7,400点、うちある程度復元可能なものは7個体であった。土器片のほとんどは磨滅がひどく、接合個体、文様表現、器形など不明の点が多い。その中でBC3 竪穴住居跡は比較的接合個体があり、他に比べ攪乱が少なかったと思われる。

遺構出土をはじめ、表採遺物も含めて分類にあたった。従来の縄文土器型式の編年に添えばほぼ前期末(大木6式)～中期中葉(大木8b式)の時期に該当する。その他若干の須恵器(8点)、土師器(35点)がある。縄文土器を文様施文技法及び器形などにより分類を試みた。

##### 第I群土器(第9図1～9、図版3の1～9)

縄文前期末の大木6式相当と思われる土器群である。竹管文、半割竹管による直曲線文、鋸歯状文が多用されている。出土量は少ない。

1類(第9図1～5、7～9) 半割竹管の内側による平行沈線の文様表現をしているものである。いずれも破片のみで、口縁部欠けているものが多く器形の判明するものは少ない。図7と8は浅鉢形、他は口縁外反又は直上ぎみの深鉢であろうか。図3は、口縁すぼまり胴部が大きく張り出した特異な深鉢形と推定される。地文風に櫛目状の沈線が施されているもの(図1)もあるが、単節斜縄文が一般的である。半割竹管による文様モチーフは、鋸歯状文や連弧文、縦横の区画文などで、口縁部だけでなく胴部にも施すものがある。ボタン状の貼付文が見られる。色調は灰褐色を呈すものが多く、胎土に砂粒含み、焼成はやや不良である。

2類(第9図6) 太めの沈線による弧状の区画文が使われている。器形は不明である。1片のみの出土である。赤褐色を呈し、焼成普通である。

##### 第II群土器(第9図10～20、図版3の10～20)

縄文中期初頭の大木7a式相当と思われる土器群である。竹管文による鋸歯状文、平行沈線、刺突文とともに隆帯や貼付文が施されている。文様モチーフは1群1類に似る。

1類(第9図10、12、16、17) 平行沈線と鋸歯状文、刺突文が主文様となっているものである。図12には指頭圧痕を施した隆帯があり、縦の綾絡文が見られる。口縁端までの残存が少なく、器形は不明だが、大旨、口縁外傾か直上ぎみの深鉢であろう。胎土に砂粒を含み荒いものが多く、焼成不良、赤褐色や褐色を呈する。

2類(第9図11、13～15) 1類の竹管文と貼付文が伴うものである。貼付には棒状、半円形、つまみ状である。口縁に推定4カ所か2カ所に貼付されていたらしい。器形は不明で1類と共通するものと思われる。胎土焼成は不良で荒く、磨滅がはげしい。色調は黒～灰褐色などである。貼付文上にはいずれも刻みや沈線が施されている。

3類(第9図18～20) 沈線文に三角状(角状)の刺突が入っているものである。平行沈線間

に上下交互刺突しているもの（図20）、角状の先端部による上方向からの刺突を並べたもの（図19）がある。図20の器形は不明だが、図19は頸部の屈曲のあり方から、口縁は外反し、胴部が強く張り出し、底部にすぼまる鉢型と思われる。地文風の楯目状沈線が特徴的である。胎土焼成は砂粒を含み粗い。暗褐色を呈す。地文は明確でない。

### 第Ⅲ群土器（第9図21～27 第10図28～36 図版3の21～42）

縄文中期前葉の大木7b式相当と見られるもので、撚糸圧痕文や沈線を用いるものである。

1類（図21～26） 撚糸圧痕文を主とするものであるが、太い隆帯を伴うものも含めた。器形は口縁直上ぎみの深鉢、浅鉢と思われる。施文には、2～4本の平行線文、縦の撚糸圧痕列、渦巻文など使用される。太い隆帯には撚糸圧痕が施される。焼成、胎土は粗なものが多い。地文は単節斜縄文LRの縦及び横回転である。

2類（図27～30、35）隆起線の区画文、曲線文に添って撚糸圧痕文が施されているものである。口縁やや内湾する深鉢や、屈曲のある浅鉢（図30）などの器形を持つ。文様のモチーフは、長楕円文、弧状文、大波状文などの組み合わせである。褐色もしくは黄褐色のものがほとんどである。焼成、胎土は砂粒を含み、粗で磨滅がはげしい。地文は、単節斜縄文LRが一般的である。

3類（図31～33） 沈線の曲線文、区画文が施されているものである。大きな山形突起をもち大波状口縁となる大型深鉢であろう。沈線の小波状や渦巻文が見られる。胎土に砂粒を含むが焼成良好である。暗褐色を呈す。地文は単節斜縄文LRが多い。

4類（図34、36） 隆起線の区画文に添って沈線文が施される隆沈線文を用いるものである。図の34は、渦巻状の突起と縦の撚糸圧痕列が口縁上端に付加されている。施文技法的にはI群2類やIV群4類に通ずるものがある。磨滅がひどく、地文は不明、褐色を呈す。

### 第Ⅳ群土器（第10図37～第12図74 図版4～図版6の111まで）

縄文中期中葉の大木8a～8b式期に比定される土器群である。隆起線文が主に用いられ、細い隆起線の貼付、太い隆帯による幅広の溝状沈線帯などで表現されている。器形や文様モチーフの相違から1～6類に細分した。

1類（図37～46） 隆起線の文様帯を口縁部に持つものである。器形は口縁内湾のキャリパー形深鉢と、口縁外反ぎみに立ち上がる深鉢浅鉢である。小波状や渦巻状、直曲線の区画文を展開し隆起線に指頭圧痕のあるもの（図37）もある。口縁上端に太い隆帯間を調整して幅広の溝状沈線帯をもち渦巻状に隆起するものも含めた（図43～46）。胎土に砂粒含み粗であるが硬質の焼成が多い。色調は一定しない。大型が多く、地文には、単節斜縄文LR、RL両方がある。

2類（図47～49） 口縁上端に隆帯のみ施し、器形が直上ぎみの深鉢、内湾ぎみの浅鉢である。隆帯から上の口唇部にかけてミガキ調整が見られる。胎土に砂粒含み粗いものが多い。褐色を



— 中荒巻遺跡 —

呈し、地文には単節斜縄文LRを使用している。

3類(図50～54) 2本の平行な細い隆起線によって、区画文、渦巻文を施しているものである。器形は、口縁内湾するキャリパー型深鉢である。平行隆線間はミガキ調整されているものが多い。口縁部文様帯を抜け出し、胴部にまで渦巻文を伸ばすもの(図50)や渦巻文部分が隆起して大突起状になり、大波状口縁となるもの(図52や53)など見られる。渦巻文が大きく強調されている点が目につく。磨滅があるが、大旨焼成良好である。地文は単節斜縄文のみである。

4類(図55～66) 平行な隆起線は4類と共通するが、その隆起線の両側に細い沈線が添うものである。隆起線自体断面四角状を呈し、くっきりと立体的になっている。器形は、口縁内湾のキャリパー形深鉢や浅鉢である。口縁部文様帯は横方向に流れる渦巻文が表現され、隆沈線の区画文は胴部にまで及び、剣先状渦巻文をもつ。渦巻文の個所が隆起して、ゆるやかな大波状口縁を成すものが多いらしい。胎土に細砂含み、焼成良好である。地文には単節斜縄文の他細い撚糸文のものも見られる。

5類(図67～69) 胴部に平行沈線文の直曲線文が施されるものである。器形は口縁部内湾したキャリパー形深鉢、口縁外反ぎみで胴部に張りをもつ深鉢である。口縁部文様帯は、沈線のみのもや隆沈線文の区画文のあるもの(第4図3)、溝状沈線をもつ太い隆帯が周るもの(図67や69)などで表現されている。頸部に無文帯をもつものがある。平行沈線では直線文や小波状文、渦巻文、剣先状渦巻文が用いられる。胎土焼成はしまり良好で、暗褐色を呈すものが多い。中型のものがほとんどで、地文には単節斜縄文の他、縦方向の撚糸文がある。既述のようにBC3住居跡に出土量が多い。

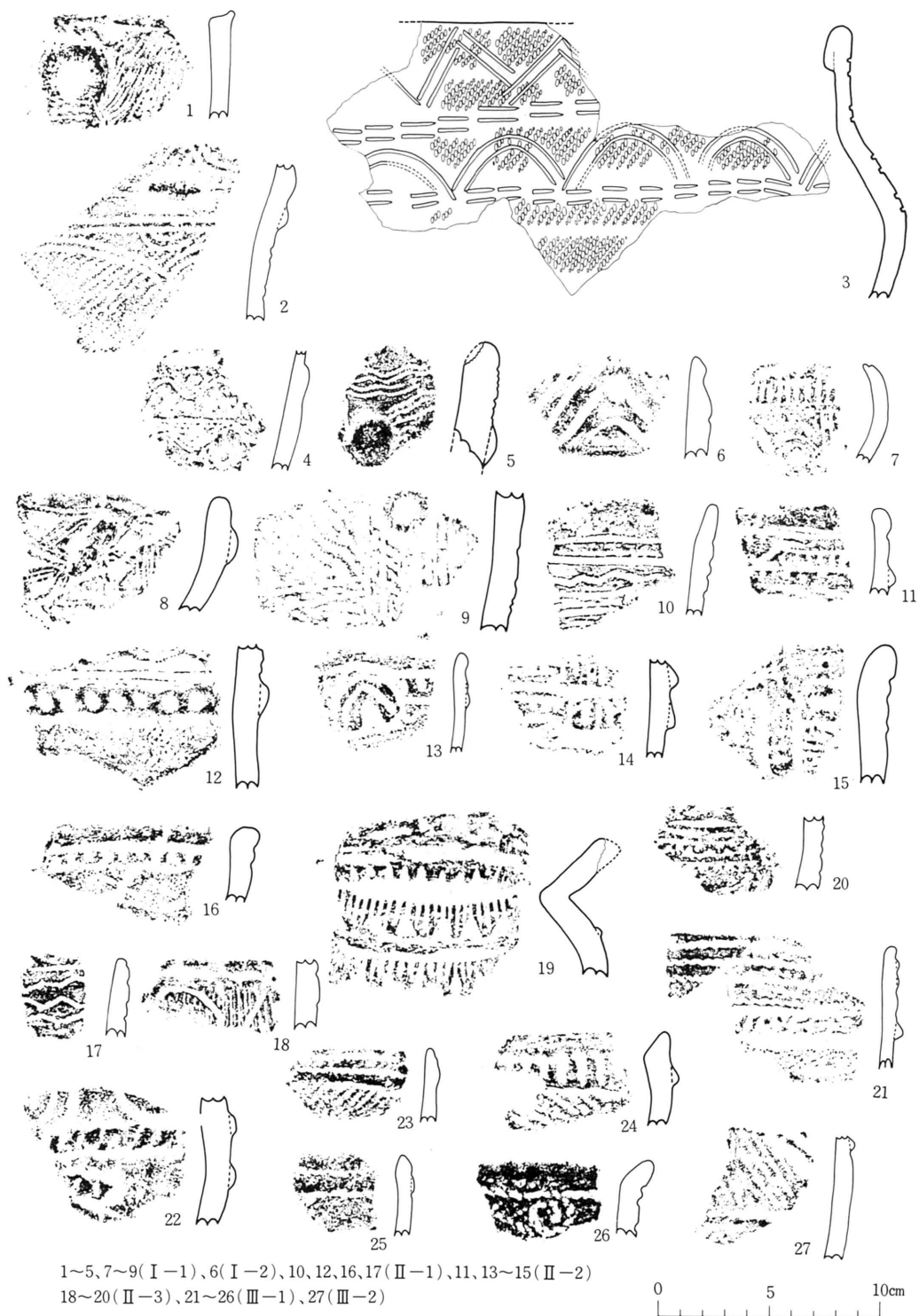
6類(図70～74) 溝状沈線帯を伴う太い隆起線による文様表現しているものを一括してこの類とした。器形はキャリパー形深鉢や口縁やや外反ぎみに立ちあがる深鉢や浅鉢を含む。渦巻文が主体である。隆帯間の沈線間はミガキ調整が施されなめらかである。図71は隆帯の上に円形竹管の刺突列点文が施されている。磨滅があり粗であるが硬質の焼成である。図70～73は頸部に無文帯を持つ。見られる地文は、単節斜縄文LRである。

第V群土器 (図面無)

地文のみのも1類、無文のもの2類である。それぞれ出土量は極少量、器形は深鉢と浅鉢であるが、2類は浅鉢だけになるらしい。胎土に砂粒含みもろいものも多く色調も一定でない。

○土師器、須恵器について

遺構に伴うものはなく、いずれも表土中で、分布上の編在性はない。土師器35点(坏口縁部1、甕口縁部2、坏胴部5、甕胴部27)須恵器8点(坏口縁部1、甕胴部6、坏底部1)である。実測可能なものはない。本遺跡南方の上餅田遺跡出土のものと類似する。



1~5, 7~9(I-1), 6(I-2), 10, 12, 16, 17(II-1), 11, 13~15(II-2)  
18~20(II-3), 21~26(III-1), 27(III-2)

第9图 I~III群土器拓影图



第10图 Ⅲ群、Ⅳ群土器拓影图



47~49(Ⅳ-2) 50~54(Ⅳ-3)  
55~62(Ⅳ-4)

0 5 10cm

第11圖 Ⅳ群土器拓影圖



62~66 (IV-4) 67~69 (IV-5)  
70~74 (IV-6)

第12图 IV群土器拓影图